

だい ごうしんこうまる
第二号新興丸

だい ごうしんこうまる みんかん かもつせん ちょうよう
第二号新興丸は民間の貨物船を徴用(*11)し、
かいぞう とくせつほうかんけんふせつかん おおみなとけいびふたい
改造した特設砲艦兼敷設艦として、大湊警備府隊
(*12)、一時はその下の千島方面根拠地隊に籍を置
ほっかいどう からふと ちしまほうめんせんだん ごえい しょうかい
き、北海道、樺太、千島方面で船団の護衛や哨戒
じゅうじ がつ そうやかいきょう
(*13)に従事していました。6月は宗谷海峡への
たいせんきらいせき こうちく さんか
対潜機雷堰(*14)構築にも参加しています。

ごぜん じころ ひ あ しゃやく
8月21日午前9時頃、引き揚げ者約3,500
にん の おおどまりこう しうっこう はじ わつかないこう めざ
人を乗せ、大泊港を出港し初め稚内港を目指
わづかないと う のうりよく げんかい たつ
しましたが、稚内の受け入れ能力が限界に達して
おたるこう む のうりよく じ う お
いるため、小樽港に向かうように指示を受け、小
たるこう む えんがん なんか よる
樽港に向け沿岸を南下していきました。夜になり
あめ なみ たか かんばん は なか
雨となり、波も高く、甲板に張られたテントの中

* 11 徴用

強制的に取り上げること

* 12 大湊警備府隊

現在の青森県むつ市にあった旧海軍の部隊

* 13 哨戒

敵の攻撃に対し見張りをすること

* 14 対潜機雷堰

対潜水艦用の機雷(水中兵器)を広範囲に設置すること

おお ひ あ しゃ ふね ゆ なか ねむ
では多くの引き揚げ者が船の揺れの中で眠りについていました。

ごぜん じはんころ あめ なみ おだ
午前3時半頃、雨がやみ、波も穏やかになり、
ふね やぎしり おき じゅんちょう こうかい つづ
船は焼尻(*15)沖を順調に航海を続けていまし
た。

じ ふん みぎ ど らいせき うげん み は
4時55分、「右50度、雷跡」と右舷見張り
いん さけ かん おお しょうげき はし おお
員が叫ぶとともに、艦に大きな衝撃が走り、大き
く右に傾きました。

ぜんいんせんとうはいち ごうれい へいし
「全員戦闘配置につけ」の号令で兵士たちが
かんばん あ かん ていし
甲板に上がってきました。艦のエンジンは停止し
ていましたが、魚雷が命中したのは二番船倉で
きかんしつ ぶじ ぱんせんそう
機関室は無事でした。それで、「エンジン始動、
びそく ぜんしん かんちょう し じ かん うご だ
微速(*16)前進」の艦長の指示で艦は動き出しま
した。

* 15 焼尻

焼尻島

* 16 微速

ゆっくり

かんぱんじょう へいし たけかこ ぎそう
甲板上では兵士たちが竹囲いで偽装(*17)して

せんかいほう おお はず せんとうはいち
いた旋回砲(*18)の覆いを外し戦闘配置についてい

だい ごうしんこうまる せんかいほう
ました。第二号新興丸には12センチ旋回砲2

もん きじゅう
門、機銃14丁を備えていました。

せんすいかんふじょう かんないほうそう き どうじ
「潜水艦浮上」の艦内放送が聞こえると同時に

せんすいかん きじゅうそうしゃ かんぱんじょう ひ あ しゃ おそ
潜水艦の機銃掃射が甲板上の引き揚げ者を襲いま

だい ごうしんこうまる はんげき かいし
した。それとともに第二号新興丸も反撃を開始し

せんとう じかんつづ
ました。戦闘はどれくらいの時間続いたのかわから

ま
りませんが、あつという間だったといいます。

てき せんすいかん せき せき
敵の潜水艦は2隻または3隻といわれています

が、はっきりはしません。しかし1隻の潜水艦の

しょうめん おお くろ みずばしら た せんすいかん すがた け
正面に大きな黒い水柱が立つと潜水艦は姿を消

しました。

* 17 偽装

囲いをして別なものに見せること

* 18 旋回砲

弾丸重量半ポンドクラスの小口径前装砲。スイヴェルガンともいう

艦長は懸命の操艦(*19)をしながら、留萌港へ
とゆっくりと艦を進めていきました。瀕死(*20)
になりながらもなんとか午前9時に留萌港南岸壁
に着岸することができました。魚雷の命中した二
番船倉にいた引き揚げ者と甲板にいて機銃掃射を
受けた人たちが帰らぬ人となりました。死亡25
0人、行方不明150人が犠牲となりました。
生き残った人々は、留萌町民の家に別れて
宿泊し、世話を受けたといいます。



特設砲艦兼敷設艦 第二号新興丸(2,577トン)

* 19 操艦

艦を運転すること

* 20 瀕死

今にも死にそうなこと